敦煌禪宗文獻分類目録

田中良昭
程　　正

〔略稱〕（追加分）

〈單著類〉

・鈴木大拙『禪思想史研究第二』（岩波書店，1951,1968,1987,2000）
→『鈴木禪思想史』2

・『鈴木大拙全集』卷2（岩波書店，1968,1980,1987　4冊本，2000）
→〈大拙〉2

・『鈴木大拙全集』卷3（岩波書店，1968,1987　4冊本，2000）
→〈大拙〉3

・宇井伯壽『禪宗史研究』（岩波書店，1939,1990）　→『宇井禪宗史』

・宇井伯壽『第二禪宗史研究』（岩波書店，1941,1990）　→『宇井禪宗史』2

・宇井伯壽『第三禪宗史研究』（岩波書店，1943,1990）　→『宇井禪宗史』3

・關口眞大『達摩大師の研究』（彰國社，1957）　→同（春秋社，1969）
→『關口達摩大師』

・關口眞大『禪宗思想史』（山喜房佛書林，1964）　→『關口禪宗思想史』

・關口眞大『達磨の研究』（岩波書店，1967）　→『關口達磨』

・田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究』第2（大東出版社，2009）
→『田中敦煌』2

〈編著類〉

・篠原壽雄・田中良昭編『敦煌佛典と禪』〈講座敦煌〉9（大東出版社，1980）
→『敦煌佛典と禪』

Ⅱ語録類（1）

1．惠達和尚頓教大乘祕密心契禪門法

①致 86　②P.tib.116

〔テキストの飜刻・校定〕

①鈴木貞太郎（大拙）『燉煌出土少室逸書』影印（1935, pp.75-76）

①鈴木貞太郎（大拙）『校刊少室逸書及解説』（1936, p.90）

①上山大峻「チベット譯『頓悟眞宗要決』の研究」（『禪文研紀要』8, 1976, pp.102-103）

②上山大峻「チベット譯『頓悟眞宗要決』の研究」（『禪文研紀要』8, 1976, p.78）

〔著書・論文〕

鈴木貞太郎（大拙）「惠達和上頓悟大乘秘密心契禪門法」（『校刊少室逸書及解説』1936, p.71）

關口眞大「敦煌出土の達摩大師撰述」（『關口達摩大師』pp.42-43）

柳田聖山「禪宗の本質（歴史的考察）—その１—」（『柳田史書』p.470）

上山大峻「チベット譯『頓悟眞宗要決』の研究」（『禪文研紀要』8, 1976, pp.62-63）

〔略記〕

既に古く 1935 年に、鈴木大拙氏によって北京の北平圖書館（現、中國國家圖書館）藏の一本が發見され、簡單な解説と共にその本文が公にされたが、その後は漢文文獻の異本の存在も知られず、後述するチベット譯②が 1976 年に上山大峻氏によって發見、紹介されるまでの長い間、この文獻について關説するものも決して多くはなかった。

本書は 11 行の偈文からなるものであるが、鈴木氏はその標題の「頓悟」（實際は「頓教」）「大乘」「秘密」「心契」「禪門」等の文字に注目され、この文獻を「慧能によりて唱え出された頓教の法門が、唐の初期において如何なる波紋を宗教思想界に描き出したかの一消息を傳えているもの」とされていた。その後、長い間この文獻について關説するものはなかったが、それから約 20 年後の 1957 年に、關口眞大氏が本文中にある「心

來無所處、尽意看更看、看看看不絶、是名無漏智」にみられるように、本書の特色が「看心」を強調するところにあり、禪宗思想發達の一面を示すものとされたのである。

また柳田聖山氏は、禪宗諸文獻に用いられる「最上乘」の呼稱に關連して、この呼稱が新來の密教に對する意味を有していたことに注意を喚起され、本書の性格を神秀の弟子敬賢（660-723）と善無畏三藏（637-735）の交渉や、普寂（651-739）と一行（683-727）との師資關係等、いわゆる禪と密教との交渉の間に出現したとされる『最上乘受菩提心戒』や『心地秘訣』と同傾向のものではないか、として位置づけられた。

ところで惠達和上については、諸氏ともに明確な言及をされず、關口氏は、「未だ惠達和上なる者の傳を詳らかにすることができない」と述べられている。從って惠達和上の爲人（ひととなり）が明白にならない限り、本書の明確な位置づけをすることはできないが、ただ惠達という名は神會の『菩提達摩南宗定是非論』（以下『定是非論』）に二度ほど出現している。もっともこの惠達は、胡適氏の『神會和尚遺集』（上海・亞東書店、1930）では、惠遠とされていたもので、民國47年（1958）に同氏が新たに校定された「新校定的敦煌寫本神會和尚遺著兩種」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』29, 臺北 1958,pp.848）と題する論文で、惠達と訂正されたものである。この惠達が今問題の惠達和上と同一人物か否かについては、もとより明らかではないが、『定是非論』には、この惠達について次のような記述がある。

すなわち、普寂と同學、從って神秀の門人の西京清禪寺僧廣濟が、景龍3年（709）11月に韶州に到着し、十數日たったある夜半、慧能の房内に入って五祖弘忍より授けられた傳信の袈裟を偸もうとした。そこで慧能が一喝すると、その喝声を聞いた惠達師と玄悟師が起き上り、房外に出て、遂に廣濟は玄悟師に手を把（つか）まれ、声も出せないようにされた。惠達師と玄悟師が慧能の房内に入ると、慧能は「誰かが房内に入り、手をのばして袈裟を取ろうとした」といい、そこで南北の道俗が房内へきて慧能に「入ってきたのは南人か北人か」と問うと、慧能は「知らない」と答え、「僧か俗か」の問にも「知らない」と答えた。しかし慧能は十分承知していて、南北の兩人が損傷し合うことを恐れてこのような答えをしたのだ、としているのである。

もとよりこの記述は、傳法の袈裟が慧能の處にあり、それを普寂の同學の者が盗みに來た、という設定で北宗攻撃をした神會（684-758）獨特の手法によるものであるが、この惠達が實在の人物だとすると、普寂（651-739）や神會と同時代ということになり、この惠達が本書の著者と目される惠達和上と同一人物であるとすれば、本書もこの時代の成立と考えられる。しかし『定是非論』による限り、神會は、惠達師、玄悟師を惠能下の人としているのであり、看心清淨を障道の因緣として退けた慧能の門下に、看心を強調する立場の人が出現することも大いに問題のあるところである。

ところで本書の著者と見られる惠達に對する研究に大きな進展をもたらしたのが、上山大峻氏の「チベット譯『頓悟眞宗要決』の研究」（『禪文研紀要』8, 1976）と題する論文である。上山氏は、『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決』（殘卷、以下『要決』）と呼ばれる敦煌禪宗文獻に對應するチベット譯②の存在を明らかにし、そこには現在知られているいずれの『要決』の漢文テキストにも缺いている内容の一部が、本書の10偈のうち第5、8、9の3偈を除く7偈と一致することを突き止められた。さらにこの10偈のみを寫した本書が、「惠達和上頓悟大乘秘蜜心契禪門法」という標題の獨立した作品であったか、それとも『要決』の中より抄出し、題を與えて別本の體裁をとったものであるかは不明であるとしながらも、「いずれにしても内容的一致により、智達＝惠達（チベット語では「智」も「惠」も同じ ses rab）を證明しえた」と指摘された。

詳細は『要決』の項目での略記に委ねることにするが、『要決』に登場する智達は、すでに伊吹敦氏の「『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決』と荷澤神會」（三崎良周『日本中國　佛教思想とその展開』山喜房佛書林、1992所收）と題する論文によって明らかにされたように、『要決』の著者である侯莫陳琰（660-712）の法名であることからして、惠達は侯莫陳琰その人であることも考えられる。

2．臥輪禪師看心法

①S646　②S1494　③P2885　④P3018　⑤禿氏祐祥氏舊藏本
⑥P.tib.116（チベット譯）

〔テキストの飜刻・校定〕

②⑤鈴木大拙「敦煌出土本中、禪に關する文獻七種につきて、第２原本」（『鈴木禪思想史』2,pp.479-480）

①②③④⑤張錫厚「『咏臥輪禪師看心法四首』補正與敦煌本『菩提達摩論』定名」（『敦煌研究』總 95 期 ,2006,pp.91-101）

〔著書・論文〕

鈴木大拙「敦煌出土本中、禪に關する文獻七種につきて、第１解説」（『鈴木禪思想史』2,pp.466-468）

關口眞大「「達摩和尚絶觀論」（燉煌出土）と牛頭禪」（『關口達摩大師』,pp.107-109）

柳田聖山「思想という語をめぐって」（『印佛研』8-1,1960,pp.206-211）

長谷部好一「禪法の交流について」（『宗學研究』3,1961,pp.100-105）

饒宗頤「神會門下摩訶衍之入藏　兼論禪門南北宗之調和問題」（『香港大學五十週年記念論文集』第１冊 ,1964,pp.173-185）

柳田聖山「『楞伽師資記』の形成—その１—」（『柳田史書』pp.67-68）

上山大峻「敦煌出土チベット文禪資料の研究—P.tib.116 とその問題點—」（『佛教文化研究所紀要』13,1974,pp.01-011）

芳村修基「臥輪禪師の問題」（同『インド大乘佛教思想研究』百華苑 ,1974,p.146）

小畠宏允「Pelliot.tib.n° 116 文獻にみえる諸禪師の研究」（『禪文研紀要』8,1976,pp.019-021）

呉其昱「臥輪禪師逸語燉煌吐蕃文（伯希和一一六號）譯本考釋兼論臥輪與摩訶衍入蕃所授禪法之關係」（『敦煌學』4,1979,pp.33-46）

田中良昭「禪僧の偈頌」（『敦煌佛典と禪』pp.258-259）

呉其昱「臥輪禪師出家安心十功德蕃本試釋（增訂本）」（『敦煌學』5,1982,pp.41-52）

呉其昱「臥輪禪師出家安心十功德蕃本試釋」（『珠海學報』16,1988,pp.77-85,311-335）

張錫厚「『咏臥輪禪師看心法四首』補正與敦煌本『菩提達摩論』定名」（『敦煌研究』總 95 期 ,2006,pp.91-101）

〔略記〕

②は巻首に「臥輪禪師看心法」と題する斷簡、⑤は鈴木大拙氏がかつて龍谷大學教授であった禿氏祐祥氏から入手された敦煌寫本の寫眞中に存在したものである。特に⑤は珍しい貝葉本で、寫眞6葉の中に『師資七祖方便五門』と『臥輪禪師看心法』があり、前者は首尾完全であるが、後者は末尾を缺いているという。鈴木氏はこの兩者を對校して『鈴木禪思想史』2に全文を示されたが、その註記の如く、兩本が一致するのは僅かに最初の「隨心動念」から、鈴木氏校訂本の3行目「徒費其功。而」に至る3行のみで、それに次ぐ「無住法行者」から10行目の「謂動觀者如得定也」までは②にはなくて③だけにある部分であり、一方②の方は、「而」以下改行で、鈴木氏校訂本の11行目にあたる「若人求道不習此」より、13行目の「無物不動性常安」までで切れ、再び改行で、14行目の「但懃向心照、必當自性悟。解時不異迷、迷時不移處。若人通達此、不求彌勒度」があって終っている。

從って、これだけでは②の連續の状態や、⑤と②との關係が不明確であって、この兩者と比較しうる新たな異本の出現が待たれるのである。『敦煌遺書總目索引』では、S6103を「臥輪禪師看心法（?）」としており、『柳田史書』に付された「敦煌禪宗關係資料一覧」では、このS6103に加えてS6331も『臥輪禪師看心法』とされている。田中良昭氏もこれによって、「敦煌禪宗資料項目別一覧」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』1,pp.92-101）では、『臥輪禪師看心法』として前掲②⑤の他に、S6103、S6331の兩本を加え、都合4本を列記したのであるが、實際はS6103は『臥輪禪師看心法』ではなく、『失題十二時曲』と『荷澤和尚五更轉』の殘卷であり、またS6331は、『敦煌遺書總目索引』に「伍子胥變文」とある如く、ともに『臥輪禪師看心法』ではない。

ところで近年、張錫厚氏が「『咏臥輪禪師看心法四首』補正與敦煌本『菩提達摩論』定名」と題する論文を『敦煌研究』總95期（2006）に發表された。張氏は從來知られていた②、⑤に加えて、①、③、④の3種のテキストを用いて本書のテキスト校訂をされた。後述するごとく、③についてはかつて關口眞大氏がすでにその存在を指摘されていたが、張氏の研究によって、本書のテキストとして新たに①、④の存在が知られるに至ったのである。張氏によれば、①は『敦煌遺書總目索引』では「佛經」「揚州

顕禪師與女人問答詩」と擬題された43行の殘卷で、その卷首の13行が本書の殘卷であり、内容的には②に類似するという。④は首尾ともに缺いたもので、現存する161行の内容を3つに分け、1～16行上は『修道去』などの偈頌であり、16行下～152行は『菩提達摩論』とよばれるもので、153行～161行は本書の一部を含む4首の詩であるという。從って『臥輪禪師看心法』は、都合前記の5本ということになるのである。

本書が後の各種禪宗文獻に廣く引用されていることは注目すべきことである。すなわち柳田氏によれば、淨覺の『楞伽師資記』における第一祖求那跋陀羅傳は、先行資料の雜然たる寄せ集めにすぎないが、その素材の一つを提供したものに本書があるといい、また關口眞大氏によれば、入唐蕃僧法成が801年に書寫したという③の牛頭法融の作とされる『達摩和尚絶觀論』の卷末に付されている19問答中、第14問答が本書の一節であるという。更に鈴木氏は、本書からの引用が永明延壽の『宗鏡録』卷98にあることを指摘されており、その思想的影響もかなりあったと考えられる。

ところで臥輪禪師には、別に『臥輪禪師偈』と題するものがあり、敦煌文獻に4種の異本の存在が知られ、『景德傳燈録』卷5にも引用されている。特に『傳燈録』では、一僧がこの臥輪禪師の偈を擧したのに對し、六祖慧能はこの偈が未だ心地を明らめず、もしこれに依れば繫縛の因を加えるとし、自ら偈を示すとして兩者の偈が對比されている。これが『壇經』にみる神秀と慧能の偈の應酬に酷似していることから、かつて鈴木氏は臥輪禪師を神秀系、すなわち北宗禪の人ではないか、とされていた。ところが圭峰宗密の『禪源諸詮集都序』卷下には、達摩系以外の散聖（さんしょう）として求那跋陀羅、僧稠と共に臥輪の名を擧げており、必ずしも達摩系とすることはできないようである。

この臥輪について柳田氏は、かつてその論文「思想という語をめぐって」において、明本『續高僧傳』卷25に傳のある曇倫、或いは『弘賛法華傳』卷7の高守節傳及び『宋高僧傳』卷27の唐五臺山海雲傳にみえる臥輪等を想定されたが、その後の『柳田史書』では、曇倫は恐らく別人であり、臥輪との異同も決し得ず、從って臥輪の爲人は不明とされた。しかし臥輪は、少くとも達摩系の禪者ではなく、元來淨土系の禪者であったらしい、というのが柳田氏のその後の推論である。

本書の強調するところは、心性は虚空の如く本來清淨であるが、心内に向かって返照し、内外熟看し、觀照しなければ大定は得られないというものであるからして、8世紀初頭には北宗禪系の資料と見なされていたと推定される。

3．觀心論（破相論）

〔敦煌本〕

①S646　②S2595　③S5532　④P2460　⑤P2657　⑥P4646

⑦龍谷大學圖書館藏122「觀門法大乘法論」本

〔敦煌本以外のもの〕

⑧金澤文庫建仁元年（1201）寫本　⑨朝鮮『禪門撮要』本

⑩金澤文庫建長4年（1252）再寫本　⑪朝鮮安心寺隆慶4年（1570）本

⑫『少室六門集』本　⑬『達磨大師三論』本

⑭日本眞福寺本

〔テキストの飜刻・校定〕

⑫『卍續藏』1輯2編15套5冊（1911,411左-414左）

⑫『大正藏』卷48諸宗部5「少室六門」（1928,pp.366c-369c）—㊦1

②『鳴沙餘韻圖版』85（Ⅲ）

①『大正藏』卷85古逸部（1932,pp.1270c-1273b）—㊦2

⑪㊦1金九經『薑園叢書』（瀋陽（奉天）,1934,pp.1-18）

⑨⑩⑫（⑦㊦2）鈴木大拙「達摩觀心論（破相論）四本對校（下）」（『大谷學報』16-2,1935,pp.1-44）—㊟

⑦⑨⑩⑫㊦1鈴木貞太郎（大拙）『校刊少室逸書及解説』付録『達摩の禪法とその思想及其他』（安宅（あたか）佛教文庫,1936,pp.166-232）→〈大拙〉別卷1

⑨花園大學祖録研究會覆印『禪門撮要』卷上（1954,pp.25-48）

⑩「達磨和尚觀心破相論」（『金澤文庫資料全書佛典第一卷禪籍篇』神奈川縣立金澤文庫,1974,pp.1-10）

⑨「高麗本禪門撮要　外」（〈禪學叢書〉2,中文出版社,1974,pp.8-13）

⑨⑫⑬椎名宏雄「諸本對校『達磨大師三論』」（『駒大佛教論集』8,1977,

pp.179-208）

⑥⑦⑨⑩⑫㊙田中良昭「「菩薩惣持法」と「觀心論」2」（『駒大佛教紀要』44,1986,pp.46-65）→『田中敦煌』2（pp.101-128）

①②③④⑤⑥⑦西口芳男「敦煌寫本七種對照『觀心論』」（『禪學研究』74,1996,pp.123-170）

〔著書・論文〕

忽滑谷快天「少室六門集の内容、誤られたる達磨の思想」（『禪學思想史』巻上，玄黄社，1923,p.318）

神尾弐春「觀心論私考」（『宗教研究』新 9-5,1932,pp98-104）→矢吹慶輝「神尾弐春氏の觀心論私考」（『鳴沙餘韻解説』第 2 部，pp.545-556）

矢吹慶輝「神尾氏の觀心論私考後記」（『宗教研究』新 9-5,1932,pp.105-106）→矢吹慶輝「神尾弐春氏の觀心論私考後記」（『鳴沙餘韻解説』第 2 部，pp.557-560）

矢吹慶輝「敦煌出土支那古禪史並に古禪籍關係文獻に就いて」（『鳴沙餘韻解説』第 2 部，pp.543-545）

禿氏祐祥「少室六門集に就て」（『龍谷學報』309,1934,pp.1-18）

鈴木大拙「達摩觀心論（破相論）四本對校（上）」（『大谷學報』15-4,1934,pp.1-17）→鈴木貞太郎（大拙）「觀心論（破相論）五本對校」（『校刊少室逸書及解説』付録『達摩の禪法とその思想及其他』1936,pp.166-180）

宇井伯壽「北宗殘簡　3 觀心論」（『宇井禪宗史』，pp.423-424）。

關口眞大「「達摩大師觀心論」（燉煌出土）と北宗禪」（『關口達摩大師』，pp.213-245）

中田萬善「敦煌出土文獻の再檢討—特に觀心論 S5532 號について」（『宗教研究』41-3,1968,pp.138-139）

中田萬善「敦煌出土文獻「大乘北宗論」及び「觀心論」について—1—」（『宗學研究』10,1968,p.86）

金原東英「荷澤神會と引用經典（一）」（『印佛研』20-2,1971,pp.146-147）

椎名宏雄「『少室六門』と『達磨大師三論』」（『駒大佛教論集』9,1978,pp.208-232）

篠原壽雄「觀心論」（『敦煌佛典と禪』pp.174-175）

仙石景章「「觀心論」の思想と特質について」（『宗學研究』23,1981,

pp.237-240）

田中良昭「「菩薩惣持法」と「觀心論」1、2、3」（『駒大佛教紀要』41, 1983, pp.199-211, 44, 1986, pp.46-65, 45, 1987, pp.32-44）→『田中敦煌』2（pp.63-128）

柳田聖山「語録の歴史—禪文獻の成立史的研究」（『東方學報』57, 1985, pp.263-269）→〈柳田〉2（pp.57-63）

鏡島元隆「達磨和尚觀心破相論」（『金澤文庫資料全書佛典第一卷禪籍篇』神奈川縣立金澤文庫, 1974, pp.56-57）

上山大峻「敦煌における禪の諸層」（『龍谷大學論集』421, 1982, pp.88-122）→上山大峻『敦煌佛教の研究』1990, pp.401-437）

田中良昭「觀心論」（『敦煌Ⅱ』, pp.61-96, 368-372）

楊曾文「神秀所著『觀心論』的禪法思想」（『隋唐佛教研究論文集』西安・陝西人民出版社, 1990）

伊吹敦「『達磨大師三論』と『少室六門』の成立と流布」（『論叢アジアの文化と思想』3, 1994, pp.01-0115）

西口芳男「敦煌寫本七種對照『觀心論』」（『禪學研究』74, 1996, pp.123-170）

伊藤晶「『觀心論』神秀著作説の再檢討」（『集刊東洋學』80, 1998, pp.20-39）

李四龍「三法無差與自性自度：以“一行三昧”爲中心的台禪兩宗觀心論比較」（『華林』1, 中華書局, 2001, pp.107-120）

西田龍雄「西夏語研究の新領域—「達摩大師觀心本母」（西夏語譯）の紹介」（『東方學』104, 2002, pp.1-20）

伊吹敦「『念佛鏡』に見る禪の影響」（『印佛研』51-1, 2002, pp.71-78）

伊吹敦「『念佛鏡』に見る八世紀後半の禪の動向」（『東洋學論叢』28, 2003, pp.95-111）

〔略記〕

本書は北宗の祖大通神秀の著作とされており、一卷の冒頭に「ただ觀心の一法のみ、總(す)べて諸行を攝(おさ)め、名づけて最要と爲す」という如く、觀心を強調した北宗禪の根本資料として重要なものとされている。既に古く『破相論』の存在が知られつつも、これが『觀心論』の異本であることが知られるようになったのは、1932年に神尾氏の論考が發表されて以來のことである。ただ『破相論』が達摩のものでないことは、更に古

く忽滑谷快天氏が『禪學思想史』巻上において指摘されていたことであり、その『破相論』が『觀心論』と同一内容のものであるとすれば、『觀心論』も達摩のものではないことになるのであるが、神尾氏は更にそれを一歩進めて、これが神秀の撰述であることを論證し、本書の位置づけをされたのである。

ところで『破相論』は別として、『觀心論』はいかなるプロセスを經てその存在が知られるようになったのであろうか。『觀心論』またの名『煎乳論』なる著述が、天台智者大師智顗にあることは既に古くから知られていたが、この『觀心論』とは全く別の『觀心論』、すなわち②が敦煌文獻に存在することを發見されたのは矢吹慶輝氏である。矢吹氏は、この首尾2葉を『鳴沙餘韻』で紹介され、それにもとづいて當時朝鮮におられた神尾氏が、この『觀心論』の異本と目されるべき數種を擧げてその概略を紹介すると共に、その著者及び著作年代等についての論考を公にされた。これが「觀心論私考」であって、それによれば『觀心論』の異本としては、明の隆慶4年（1570）朝鮮安心寺で開板されたという⑪の『達摩大師觀心論』、同じく隆熙元年（1907）朝鮮の虎踞山雲門寺で刊行された『禪門撮要』巻上に收録された⑨の『觀心論　初祖達摩大師説』、更に江戸時代日本で編集された『少室六門集』の第2門とされる⑧の『破相論』の3種があるという。それらの對照によって、『破相論』が『觀心論』の異本であることが明らかにされたのである。またその著者についても、朝鮮本の2種が達摩大師の説述としているのに對し、貞元（ていげん）4年（788）より元和5年（810）にかけて完成をみた慧琳の『一切經音義』第100巻42張に、『觀心論』の7語14字の音義が釋されており、そこに「觀心論　大通神秀作」と記されているところから、この『觀心論』の著者を北宗禪の祖とされる大通神秀と決せられ、また矢吹氏も、「神尾氏の觀心論私考後記」において、この神尾氏による著者の決定を高く評價されたのである。

一方、奉天（現、瀋陽）の金九經氏は、1934年神尾氏の發見紹介になる朝鮮安心寺本、すなわち⑪と、『大正藏』巻85所收の敦煌本②、すなわち㊦2とを対校し、これを『大乘開心顯性頓悟眞宗論』と共に『薑園（きょうえん）叢書』に收録された。

先に述べた神尾、矢吹兩氏による『觀心論』の論考、特にその作者を

神秀とすることに對して、鈴木氏はこれを達摩作とする立場から賛同せず、神秀作と決定する前に、もう少し客觀的、歴史的、又内容的に詮索を續けなくてはいけないとの見地に立って、一層嚴密な異本の對校を目指したのである。すなわち『大正藏』巻85所收の敦煌本②を最古のものとし、それに加えてなお36問を有するという禿氏祐祥氏紹介の龍谷本⑦を對校したものを敦煌出土本と稱し、それに同じく禿氏氏の紹介になる金澤文庫藏の⑧と⑩の2種の内、唐の會昌5年（845）に書寫したものを、日本の建長4年(1252)に夜叉王丸が再寫したという『達摩和尚觀心破相論』の首題を有する金澤文庫本⑩、朝鮮刊本⑨、日本流通の『少室六門集』本⑫の都合4本の對校を1935年に『大谷學報』16-2に發表され、更に翌1936年には、敦煌出土本の内、龍谷本⑦を別立して、『少室逸書解説』の付録、『達摩の禪法と思想及其他』に、⑦⑨⑩⑫㊦2の5本対校を掲載された。

この鈴木氏の詳細な異本の對校による本文紹介がなされたために、1939年に出版の宇井伯壽氏の『禪宗史研究』では、第8に「北宗殘簡」として北宗禪資料10篇の校訂を掲載するに際し、第4篇の『觀心論』のみは、神秀撰とするのみで本文を省略している。

その後約20年間は、本書に關説するものは特に見られなかったが、1957年に關口眞大氏が『達摩大師の研究』を刊行された際、その第2章第4に、「達摩大師觀心論（燉煌出土）と北宗禪」と題して詳細な論究をされ、『觀心論』の内容、及び『傳教大師将來越州録』中の「看心論一巻」や、『智證大師将來録』中の「六祖和尚觀心偈一巻」等の将來目録の記載から、神尾氏の神秀撰述説に從うべきことを論證され、『觀心論』の神秀撰述説をより強固なものとしたのである。

その後、敦煌出土のスタイン本中に③の存在することが中田萬善氏によって發見紹介され、更にペリオ本中にも3種の異本の存在が知られるに至った。すなわち③④⑤⑥がそれである。④は、「殘道經」の背に梁武帝撰「第一祖達摩禪師」の碑文4行に先立って『觀心論』の本文の一部があり、⑤は、1巻の首部約4分の1と尾部僅かを缺いていて題名はみられないが、内容からして『觀心論』の一異本である。また⑥は、『維摩經』『文殊師利般若經』『頓悟大乘正理決』『觀心論』『禪門經』を連寫した183葉からなる梵夾式蝶装本中の一篇で、『觀心論』は159葉から175葉に相當し、首尾は完全であるが、中途に若干の脱文がある。上山大峻氏は、「敦

煌における禪の諸層」（『龍谷大學論集』421,1982,pp.88-122）と題する論文において、この寫本を、敦煌の禪の寫本群を3時期に分けて、750-780年頃の初期、チベット支配期（786-848）中及びその影響の殘る若干期間で790-860年頃の中期、そして歸義軍時代に入って以降の900-1000年頃の後期とする内の、中期の寫本に當てられた。この⑥を底本とし、⑦⑨⑩⑫鈴の諸本を校本に用いて本書のテキスト校訂をしたのが田中良昭氏の「「菩薩惣持法」と「觀心論」2」（『駒大佛教紀要』44,1986→『田中敦煌』2）と題する論文であり、さらにその現代語譯を「觀心論」と題して『敦煌Ⅱ』に公刊している。また①は柳田聖山氏の「語録の歴史ー禪文獻の成立史的研究」と題する論文によって始めて紹介されたが、それは本書の第3の問答の一部と一致する内容を有しているという。そして上述の7種の敦煌本テキストの全文を對照する形で發表されたのが、西口芳男氏の「敦煌寫本七種對照『觀心論』」（『禪學研究』74,1996）と題する論文である。

本書は14の問答からなるが、この問答形式は他の初期禪宗語録にも共通する特色で、著述者が自らの思想・禪法を廣く一般に説示するために、自ら問を設け自ら答えるという自問自答の形式をとっている。その内容は、その冒頭に、「ただ觀心の一法のみ、總べて諸行を攝め、名づけて最要と爲す」という如く、自己に本來そなわっている佛心を見究め悟ることが佛道修行の眼目であることを強調しようとしたものである。前述のごとく、本書は北宗禪の祖とされる神秀の作品とみられ、神秀は、初期禪宗において、四祖道信、五祖弘忍による東山法門のもっとも忠實な繼承者の地位にあり、從ってその禪法も、道信が守一と説き、弘忍がそれを深めて守心乃至は守本眞心と説いて、本來的な一にして眞實なる佛心を守るべきことを強調したのを受けて、その守一・守心を觀心に置き換え、一層の徹底をはかろうとしたものである。14問答のテーマの内、前半は清淨心と染汚心、聖と凡、無明の根本としての三毒、三毒が六根に現われた六賊、六賊によって生ずる六趣、三毒による三界、三界からの解脱等、人間の心を汚す煩惱と修行によるその煩惱からの解脱の問題が取り上げられ、後半は菩薩道としての三聚淨戒と六波羅蜜乃至六度といった佛教の實踐修行、更には造寺、造像、燒香、散花、長明燈、六時行道、齋食、禮拜、衆僧洗浴、念佛といった佛教徒の福德行を擧げ、それらに

對して獨自の禪的解釋をほどこしつつ、そうしたもろもろの修行法によって解脱が可能であるにもかかわらず、何故に觀心の一法のみで成佛することができるのか、という神秀を祖とする北宗の禪法の核心が説き示されている。

ところで、伊藤晶氏は「『觀心論』神秀著作説の再檢討」（『集刊東洋學』80,1998）と題する論文の中で、本書の内容を『楞伽師資記』や『傳法寶紀』などいわゆる北宗の禪籍で言及された禪思想と比較し、そこにかなりの相違がみられるとして本書の神秀撰述説に異議を唱え、新たな問題提起をされた。

また伊吹敦氏は、「『念佛鏡』に見る八世紀後半の禪の動向」（『東洋學論叢』28,2003）と題した論文の中で、8世紀末から9世紀初頭にかけての成立と見られる中國淨土教文獻である『念佛鏡』の「第十釋衆疑惑門」に含まれ、禪宗に對して淨土教の優位性を強調した「第三念佛對坐禪門」の内容に考察を加え、本書や『修心要論』などが『念佛鏡』で行われた禪宗批判の主たる對象とされた一方、『念佛鏡』に強い影響も與えたという見解を示された。

このように、本書の異本の數は極めて多く、本書の西夏語譯の確認もなされ、早くから中國西邊の地敦煌の洞窟内に收藏される一方、朝鮮や日本にも廣く流布傳承されていた點で注目すべきものである。

4．蘄州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論（最上乘論）

〔敦煌本〕

①S2669V　②S3558　③S4064　④S6159　⑤P3434　⑥P3559
⑦P3777　⑧宇04　⑨裳75　⑩Дx 649V（L1277）
⑪Дx 1996B ⑫Дx 2006B（L2642）　⑬Дx 5955
⑭龍谷大學所藏122「觀門法大乘法論」本

〔敦煌本以外の主要なもの〕

⑮朝鮮『禪門撮要』本　⑯朝鮮安心寺本

〔テキストの飜刻・校定〕

⑯『卍續藏』1輯2編15套5冊（1911,415右-417右）—卍

⑪卍『大正藏』巻 48, 諸宗部 5 （1928, pp.377a-379b）

⑧鈴木貞太郎（大拙）『燉煌出土少室逸書』影印（1935, pp.23-34）

⑧⑪鈴木貞太郎（大拙）『校刊少室逸書及解説』（安宅佛教文庫 , 1936, pp.41-52）

⑧⑭⑮鈴木貞太郎（大拙）『校刊少室逸書及解説』付録『達摩の禪法とその思想及其他』（安宅佛教文庫 , 1936, pp.143-165）—㊙

⑮花園大學祖録研究會覆印『禪門撮要』上（1954,pp.95-111）

①②③㊙『鈴木禪思想史』2（pp.316-323）→〈大拙〉2

⑮柳田聖山主編『高麗本禪門撮要他』〈禪學叢書〉2（中文出版社 , 1974, pp. 25-29）

①②③⑤⑥⑦⑧⑭⑮ John R.McRae : *The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism* University of Hawaii Press, 1986, pp.01-016.

①②③⑤⑥⑦⑧⑭⑮田中良昭「校注和譯『蘄州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論』」（『駒大禪研年報』2, 1991, pp34-49）→『田中敦煌』2（pp.41-60）

⑩⑪⑫程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」（『禪學研究』83, 2005, pp.27-30）

⑩⑪⑫中西久味「『俄藏敦煌文獻』禪籍資料初探」（『比較宗教思想研究』5, 2005, pp.69-70）

⑬程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について（二）」（『駒大佛教論集』39, 2008, pp.379-380）

〔著書・論文〕

忽滑谷快天「最上乘論；最上乘論は弘忍の眞説に非ざる諸證並に金剛經」（『禪學思想史』巻上 , 玄黄社 , 1923, pp.371-374）→中國語譯：朱謙之譯『中國禪學思想史』（上海古籍出版社 , 2004）

鈴木大拙「龍谷大學附屬圖書館藏敦煌本「菩提達摩觀門法大乘法論」殊に其中の「宗修心要論」に就きて」（『大谷學報』16-1, 1935, pp.17-51）→『校刊少室逸書及解説』付録『達摩の禪法とその思想及其他』第 2 篇 , 安宅佛教文庫 ,1936, pp.105-120）→「修心要論につきて」（『鈴木禪思想史』3, pp.298-316）→〈大拙〉2

柳田聖山「傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禪

研究資料の札記—その1—」（『禪學研究』53,1963,pp.45-71）→〈柳田〉1（pp.188-223）

關口眞大「弘忍の守本眞心」（『關口禪宗思想史』pp.80-85）

中田萬善「燉煌文獻の再檢討—特に弘忍の修心要論について—」（『印佛研』17-2,1969,pp.269-272）

中川孝「『修心要論』とその著者に就いて」（『禪文研紀要』10,1978,pp.1-9）

渡部正英「五祖弘忍の當時の眞如について」（『印佛研』26-2,1978,pp.190-191）

中川孝「東山法門の開演（『修心要論』）」（『敦煌佛典と禪』pp.153-162）

田中良昭「修心要論」（『敦煌Ⅱ』pp.39-59）

黄青萍「敦煌出土『修心要論』連寫本文獻研究史略及其意義」（印順文教基金會95〈2006〉年度「論文奬學金」受賞論文）

椎名宏雄「『修心要論』と『最上乘論』との諸本」（『宗學研究』50,2008,pp.153-158）

〔略記〕

本書は、中國禪宗の五祖、蘄州黄梅憑茂山の弘忍の述作といわれ、その内容は、「守心（守眞心、守本眞心ともいう）こそ涅槃の根本、入道の要門、十二部經の宗、三世諸佛の祖なり」というごとく、四祖道信の守一不移の禪風を繼承發展させて、守心の禪風を發揚したものであり、五祖弘忍によって確立された東山法門の思想禪風を示す貴重な資料とされている。

既に古く「最上乘論、第五祖弘忍禪師述」として『卍續藏』の禪宗著述部中に收録されているが、それは後記によれば、明の隆慶4年（1570）に朝鮮安心寺で開板されたものを、日本の正德6年（1716）に尼妙嚴（みょうごん）が彫刻し、宣流させたものである。しかし、忽滑谷快天氏はその著『禪學思想史』卷上において、本書が初學をして『觀無量壽經』に依らしめるのは、祖門の正傳にあらず等、5種の反證をあげて弘忍の眞説ではないと主張された。

從って、その後『最上乘論』はほとんど重視されることもなかったのであるが、偶々蘄州忍和上、すなわち蘄州憑茂山の弘忍禪師の述作とされ

る『修心要論』が敦煌から發見され、鈴木大拙氏による對校の結果、兩者が多少の差こそあれ本來同一のものであることが立證されるに至り、以來これが禪宗第五祖弘忍禪師の述作として初期の禪思想を傳える重要な資料とされるにいったのである。

ところが近年、伊吹敦氏は『禪の歴史』（法藏館,2001,p.25）の中で、本書を類似した名稱を持つ『導凡趣聖心決』とともに、最も早く東山法門の教えを中原に傳えた嵩山法如の系統で傳持された綱要書であるとし、本書の弘忍著述説を退けながらも、その思想を東山法門のそれを最も忠實に傳えるものであると位置づけられた。また臺灣の黄青萍氏が「敦煌出土『修心要論』連寫本文獻研究史略及其意義」と題した論文を發表し、敦煌から發見された本書のテキストのほとんどが連寫本であることに焦點を當てて考察を加えられた。黄氏の研究によれば、本書の連寫本には一定のパターンが見られ、本書を「五方便法門」を傳承する普寂一派と異なる北宗禪の法脈によったものであると推定された。

本書の敦煌本は今日14種の存在が知られているが、最初に紹介されたのは⑭の龍谷本である。それは禿氏祐祥氏が1934年に「少室六門集に就て」と題する論文でその存在を報告され、それにもとづいて翌1935年、鈴木氏が『修心要論』を中心とした龍谷本についての論考を發表されて以來注目されるようになったもので、表紙には「西天竺國沙門菩提達摩禪師觀門法大乘法論」なる表題を持ち、68紙からなる唐末の長册子本で、この中には『四弘誓願』、『南天竺國菩提達摩禪師觀門』（表題はこれにもとづくものか）、『法性論』（擬）、『證心論』、『修心要論』、『三寶問答』（擬）、『觀心論』という如く、初期禪宗の重要資料が連寫されているものであり、今問題の『修心要論』は具には『蘄州忍大師是祖超凡趣聖悟解脱宗修心要論』なる題名がつけられている。

また鈴木氏は、この龍谷本についての論考を公にする前年の1934年夏に、北京の北平國立圖書館（現、中國國家圖書館）にて⑧の北京本を見ておられ、1935年に影印本『燉煌出土少室逸書』でこれを紹介される一方、その解説である『少室逸書解説』において⑮の朝鮮版本との對校を、更にその附録『達摩の禪法とその思想及其他』で、⑧の北京本、⑭の龍谷本、⑮の朝鮮版本の3本の對校を公にされた。この内北京本は鈴木氏によって『一乘顯自心論』と擬題され、朝鮮版本の題名は『最上乘論』となっ

ている。

更に翌1936年、鈴木氏はロンドン大英博物館（現、大英圖書館）でスタイン本を調査された際、その中に①のS2669、②のS3558、③のS4064の3種に『修心要論』のあることを發見され、先に『少室逸書解説』の付録である『達摩の禪法とその思想及其他』でなした⑧⑭⑮の3本の對校と、新發見のスタイン本①②③の3本を加えた都合6本の對校を、1951年出版の『禪思想史研究』第2に發表された。この『禪思想史研究』第2は、後に『鈴木大拙全集』巻2として改訂出版されている。

スタイン本3種の表題は、①が『蘄州忍和尚導凡趣聖悟解脱宗修心要論』で、②と③は「忍和尚」を「忍和上」とする違いのみで一致し、②は後半を缺いているが、②③共に『了性句並序　崇濟寺禪師滿和尚撰』『澄心論』『除睡呪』『修心要論』の連寫本で、後述する⑦のペリオ本をも併せて②③⑦の3種が同一系統の寫本であることが知られる。

一方①は、最初に首部を缺く『軍勝氣象占』の第2第3があり、以下は『四弘誓願』、『（南）天竹國菩提達摩禪師觀門』、『法性論』（擬）、『澄心論』、『除睡呪』、『修心要論』、『三寶問答』（擬）、『大乘諸法二邊義』が連寫され、最後の『大乘諸法二邊義』は第一問の問いの部分のみで斷缺しているが、これが⑭の龍谷本と同一系統の寫本であることは明らかである。④については、程正氏の紹介によれば、現存の17行の内容は2つに分けられ、その前半の8行が本書の一部で、内容的にはちょうど田中校訂本の（16）、（17）に相當するものであるという。

一方、ペリオ本關係では、1963年に柳田聖山氏が「傳法寶紀とその作者—ペリオ3559號文書をめぐる北宗禪研究資料の札記—その1—」を『禪學研究』53（1963→〈柳田〉1）に發表された際、⑥のP3559に『導凡聖悟解脱宗修心要論蘄州忍和上』のあることを報告された。この⑥の『修心要論』を含むP3559は、首部を缺いているが、『円明論一卷』、『導凡聖悟解脱宗修心要論蘄州忍和上』、『秀和上傳』、『導凡趣聖心決』、『夜坐號一首』、『傳法寶紀並序　京兆杜朏字方明撰』、『終南山歸寺大通道和上塔文』、『先德集於雙峰山塔各談玄理十二』、『稠禪師意』、『稠禪師藥方療有漏』、『大乘心行論　稠禪師』、『寂和上偈』、『姚和上金剛五禮』、『大般若關』の14種の北宗禪關係の文獻を連寫した長卷子本で、柳田氏はこれら各文獻の詳細な檢討と紹介をしつつ、その中に含まれる『傳法寶紀』の作者に

ついての新たな論究を試みられた。

なお本書のペリオ本については、柳田氏が前記論文の中で、⑥のP3559の他に、呉江陸譯、法國伯希和編『巴黎圖書館敦煌寫本書目』に、「華文・導凡趣聖悟解脱宗修心要論一卷、蘄州忍和上著、背有大順四年（893）書、甚潦草」とあるによるとして、⑤のP3434の存在を報告されている。ただ大順の年號は890～891の2年までで景福と改元されるから、大順4年は問題である。先に触れた⑦のP3777は、『菩薩惣持法一卷』を頭に、『了性句并序　崇濟寺禪師滿和尚撰』、『澄心論』、『除睡呪』、『入定呪』、『蘄州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論一卷』を連寫したもので、スタイン本の②③と同一系統の寫本とみられる。

その後、John R. McRae氏が①②③④⑤⑥⑦⑧⑭⑮の9種のテキストを用いて本書のテキストを校訂され、その成果を *The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism* University of Hawaii Press,1986に收録された。一方、田中良昭氏は、McRae校訂本に對して、底本が明確ではなく、また脚注があるものの、その基準が曖昧であると指摘し、⑦を底本とし他の8種を校本として新たなテキスト校訂を行い、その成果を「校注和譯『蘄州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論』」（『駒大禪研年報』2, 1991→『田中敦煌』2）と題して公刊し、その現代語譯を「修心要論」と題して『敦煌Ⅱ』に收載された。

一方、ロシアの東洋學研究所サンクトペテルブルク分所に收藏されるオルデンブルグコレクションの中にも、本書のテキストとして⑩⑪⑫⑬の4種の存在が知られている。

このオルデンブルグコレクションについては、かつて岩波書店發行の雜誌『文學』38卷12號（1970年12月發行）に、當時金澤大學教授であった川口久雄氏が、「ソヴェートにある敦煌資料 — 日本文學との關係 —」と題してかなり詳細に紹介されている。それによれば、レニングラード（當時）の敦煌寫本は、斷片を含めて總數12,000點にのぼり、L.N.メンシコフ氏を中心とする敦煌文獻研究グループによって刊行された『敦煌寫本解説目録』の第1卷第2卷の既刊2冊でその内の3000點が紹介濟であるという。實際は、メンシコフ氏が中心となって作成されたこれらの2冊の目録は、『ソ連アジア民族研究所藏敦煌漢文寫本注記目録』と題し、1963、1967に分冊刊行された。第1分冊に1707點、第2分冊に1708號

から2951號までの1244點がそれぞれ收められていて、２冊をあわせると2951點の漢文寫本の目録が收録されている。その後1999年に、これら２冊の目録の中國語譯が上海古籍出版社より『俄藏敦煌漢文寫卷敍録』（上、下２卷）と題して刊行されている。

ところでこの『俄藏敦煌漢文寫卷敍録』のうち、その第１卷のL1277に『尊凡起聖悞脱修心成佛要論』と題して、「願（同行）者（傳）□（欲行解）」より「羅者彼也、蜜者岸也、答、阿之言無、耨之言上、多之言正、藐之言…」までがあるということであるが、この内タイトルの尊は導、起は趣、悞は悟の誤記であることは明らかであり、成佛の２字はこの一本に特に附加されたものと思われる。

『俄藏敦煌』にある本書のテキストについては、まず從來その存在が知られていた⑩⑪⑫の３種がある。本書に關連する内容については、⑩はわずかに「導凡趣聖悞脱宗修心成佛要論」のタイトルとその下に記されている「蘄州忍禪師　譯」のみであり、一方の⑪と⑫は補修材料として利用された同じテキストの違う部分で、およそ35字前後の斷簡である。さらに、程正氏の「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について（二）」（『駒大佛教論集』39,2008）と題する論文によって、⑬が本書のテキストであることが明らかにされた。程氏の紹介によれば、⑬は本書の尾部を書寫した斷簡であるが、尾題は存在せず、しかも殘存する24行のうち、１行目から17行目までは下半分の損傷が著しく、18行目から24行目までの内容は辛うじて保存されている状態であり、これらの行から推察すれば、本來このテキストは１行およそ28字で書寫されていたことが知られるという。

以上のように『修心要論』の現存寫本は14種とその數が多く、しかも世界各國にわたってもたらされていることに特色があり、今日では影印本の刊行によってことごとく日本でその内容を知ることができるのである。

5．師資七祖方便五門

①禿氏祐祥氏舊藏本

〔テキストの飜刻・校定〕

①鈴木大拙「敦煌出土本中，禪に關する文獻七種につきて，第２　原本７」（『鈴木禪思想史』2, pp.480-482）

①上山大峻「チベット譯『頓悟眞宗要決』の研究」（『禪文研紀要』8, 1976, p.102）

〔著書・論文〕

鈴木大拙「敦煌出土本中、禪に關する文獻七種につきて、第１　解説」（『鈴木禪思想史』2, pp.466-468）

上山大峻「チベット譯『頓悟眞宗要決』の研究」（『禪文研紀要』8, 1976, p.35）

程正「初期禪宗における「七祖」の問題—北宗を中心にして—」（『駒大佛教論集』34, 2003, p.314）

〔略記〕

①は、鈴木大拙氏が當時龍谷大學の教授であった禿氏祐祥氏から入手した貝葉形の敦煌寫本の寫眞６葉の内、『臥輪禪師看心法』に先立つ最初の部分に存するもので、首尾完全であるという。鈴木氏はこれを校訂して、『鈴木禪思想史』２の第７篇「敦煌出土本中、禪に關する文獻七種につきて」の「第２ 原本」の７に掲げられ、それに先立つ「第１ 解説」でごく簡單にこの文獻を「北宗系の思想を摘要したもの」と指摘されたのである。

ところが上山大峻は、「チベット譯『頓悟眞宗要決』の研究」（『禪文研紀要』８,1976）と題する論文において、本書は『楞伽師資記』と『要決』の２文獻から抄出したものであるとし、特に本書の「侯莫陳口決云」で始る寫本の末尾９行にわたる部分がすべて『要決』より抄出されたものであり、これらのいずれもが『要決』の漢文諸寫本とチベット譯本中に同定できるという。

本書の表題については、鈴木氏校訂本では『師資七祖方便五門　摘句抽心録之如左』とされている。すなわち『師資七祖方便五門』とされる

ものから重要な句を選び出して記録したものということであろうが、事實本文を見ると、前後一貫したものというよりはそれぞれ特色ある言句をとり出して並べ記したもの、という印象が強い。

特に本書には、複數の初期禪宗文獻の内容と類似した部分が多い。すなわち、

『師資七祖方便五門』本文	類似する他の禪宗文獻の内容
凡聖本性無殊	「含生凡聖同一眞性」（『二入四行論』）
定慧双開	「定慧雙修」（『證心論』） 「定慧等用」（『法性論』（擬））
閑居淨坐、守本歸眞	「蕭然淨坐、守本眞心」（『楞伽師資記』弘忍章）
求淨佛國、離貢高心、清淨爲西方、去心乱名中國。經云、無量劫一念、一念無量劫、無量方一方、一方無量方。佛爲利根説、不爲浅識者。	「曰、用向西方不。信曰、若知心本來不生不滅、究竟清淨、即是淨佛國土。更不須向西方。華嚴經云、無量劫一念、一念無量劫。須知一方無量方、無量方一方。佛爲鈍根衆生、令向西方、不爲利根人説也」（『楞伽師資記』道信章）

以上の對比からして、ここにいう「師資七祖」とは、その背景に初期禪宗の七祖説があり、しかも「方便五門」とは、北宗禪の文獻である『大乘五方便』とも關連して北宗禪を意味していると考えられ、この場合の師資七祖は、北宗禪で唱え出された七祖説であると推定される。

北宗禪の七祖説としては、『法如禪師行状碑』や『傳法寶紀』等、初期にみられる初祖達摩から、慧可、僧璨、道信、弘忍、法如、さらには神秀に至る７代の系譜、或いは、『楞伽師資記』にみられる求那跋陀羅を第１とし、以下達摩、慧可、僧璨、道信、弘忍と續いて７代の神秀に至る系譜等があるが、この場合はそれよりも、慧能の弟子荷澤神會が、『南宗定是非論』の中で、「今普寂禪師在嵩山竪碑銘、立七祖堂、修法寶紀、排七代數、不見著能禪師」或いは「今普寂禪師自稱爲第七代、妄竪秀和上爲第六代、所以不許」といって激しく批難した、初祖達摩から、慧可、僧璨、道信、弘忍、神秀を經て七祖普寂に至る師資七祖の系譜を指したものではなかろうか。普寂が禪宗第七祖とされたことは、李邕が普寂のために撰した『大照禪師塔銘』（742、『全唐文新編』巻 262）や、李華撰『潤州天鄉寺故大德雲禪師碑』（766 頃、『全唐文新編』巻 320）など、また敦

煌文獻のS2512vに、普寂の入滅に當っての斎讃文とみられる『第七祖大照和尚寂滅日斎讃文』（擬）が存在し、その中でも普寂、すなわち大照和尚が第七祖とされていた事實によって窺い知れるのである。しかも、田中良昭氏によって最初に紹介された『第七祖大照和尚寂滅日斎讃文』（擬）にある「創頭大照和尚、了一心源、并依弘正導師開五方便」（『田中敦煌』p.555）という内容からしても、「大乘五方便」が普寂を第七祖とする北宗の禪者たちによったものとの推察も可能となる。

この意味で本書は、普寂を七祖とする「師資七祖」を主張した北宗のグループと、「方便五門」を内容とする『大乘五方便』を編纂したグループとの密接な關係を示す貴重な文獻ではないかとされている。

6. 七祖法寶記

①殷38　②新1272　③大谷大學圖書館藏「諸經要抄」（擬）

〔テキストの飜刻・校定〕

①②華方田「七祖法寶記下卷」（『方・藏外』2, pp.134-165）

①②③沖本克己「『七祖法寶記』について」（『禪學研究』75, 1997, pp.32-60）→同氏『禪思想形成史の研究』〈研究報告〉5（花園大學國際禪學研究所, 1998, pp.247-277）

〔著書・論文〕

華方田「七祖法寶記下卷」（『方・藏外』2, p.133）

沖本克己「『七祖法寶記』について」（『禪學研究』75, 1997, pp.16-32）→同氏『禪思想形成史の研究』〈研究報告〉5（花園大學國際禪學研究所, 1998, pp.232-247）

椎名宏雄「『七祖法寶記』解題」柳田聖山, 椎名宏雄編『禪學典籍叢刊』別卷（臨川書店, 2001, pp.443-446）

程正「『七祖法寶記』に關する一考察—特にその成立について—」（『駒大佛教學研究會年報』37, 2004, pp.17-31）

〔略記〕

禪宗文獻として本書の存在を最初に學界に紹介されたのは、1996年刊行の『方・藏外』2に收載された華方田氏の「七祖法寶記下卷」と題する論文である。華氏は簡潔な解題を付した後、①と②を用いて本文の校定を行った。さらにその校定に際し、本書が様ざまな大乘經典からの引用からなる部分が極めて多いことから、大正藏本を用いてその引用のもととなる經典との校合をされ、その異同を脚註で示された。

次にその翌年の1997年、沖本克己氏が、華氏の論文を受けて新たに「『七祖法寶記』について」と題する論文を『禪學研究』75に發表された。この論文は、大きく「テキストについて」、「引用經典について」、「題名について」、「テキストの翻刻」という四つの部分にわけ、多方面にわたって本書の謎の解明を試みられたものである。特に「テキストの翻刻」において、沖本氏は前記の①②のほかに新たに大谷大學圖書館所藏の③を加え、より完全な本文校定をされている。

ところで本書は、3種のテキストを有するものの、いずれも殘卷であるために、いまなお完全なテキストの復元には至っていない。しかもいずれも首題を缺いているからして、3種のうち唯一「七祖法寶記卷下」の尾題を有する②によってこの名稱が用いられている。

沖本氏によれば、これら3種のうち①と②は直接結合することはできないが、紙質、字體、内容などから判斷して本來同一の卷子本であったとされる。そして①は3紙からなり、その第2、3紙は縱25.5cm、横42cm、それぞれ39行と38行で、1行は33字から38字の間であるといい、②は都合4紙からなり、縱の長さは①と同じで、横は順に29cm（前半斷缺）、43cm、43cm、20cmとなっていて、完全な2紙と3紙はそれぞれ41行と44行であり、1行が32字から43字までのばらつきがあるという。また、形状こそ異なるものの、③はちょうど①と②の間に缺落した部分を補う形になっていて、126行を有しているという。

本書の題名にある「七祖」については、華氏は確定し難いとしながらも、文獻の中身である多くの經典の引用から、北宗神秀の弟子の普寂あるいは義福等ではないか、との推測をされたのに對し、沖本氏は華氏の假説を批判して、「七祖」は神會でなければならないと主張された。この沖本氏の主張に賛同しつつも、その立證が不十分であるとし、新たな考察を

加えたのが、程正氏の「『七祖法寶記』に關する一考察—特にその成立について—」と題する論文である。程氏の研究によれば、「七祖」は神會であり、「傳寶紀七祖一卷」という尾題をもつ北宗の燈史である『傳法寶紀』の主張に對抗し、神會に始まる荷澤宗の人びとが、神會こそ達摩正系の七祖であることを宣揚するために、その歿年（758）から淨衆・保唐系の燈史である『歷代法寶記』の成立年とされる774年までの間に編集されたのが本書であり、しかも本書が『歷代法寶記』の成立にも大きな影響を及ぼしたという。

如上の沖本、程の兩氏の推論通り、本書にいう「七祖」が神會であるとすれば、現在失われている本書の前半部分の内容は、おそらく神會を七祖とした荷澤宗の祖統説が含まれていたであろうし、本書も燈史の1種とすべきであろう。

しかし現存する本書の内容を見ると、そのほとんどが大乘經典の引用であることからして、推論によるよりも現存部分の内容を尊重すべきとの見地から、本書を燈史類ではなく敢えて語録類に入れた次第である。